

実験用ニホンザルの繁殖コロニー設置に関する要望書

平成 13 年 6 月 7 日

日本霊長類学会会長
杉山幸丸

サル類は、医学・生物学の研究分野の実験用動物として、きわめて重要な役割をはたしている。しかしながら、現在、我が国で動物実験に用いられているニホンザルのほとんどは、有害鳥獣駆除として捕獲された野生由来の動物であり、そのことがさまざまな議論をまきおこしている。かつては、実験に用いられるサル類のほとんどが野生由来であったが、近年の実験用動物をめぐる社会情勢は、国内的にも国際的にも大きく変化している。

国内的には、有害鳥獣駆除としての野生ニホンザル捕殺頭数の近年の増加は、ニホンザルという種の保全にとって、憂慮すべき事態を招くに至っている。ニホンザルが生息する地域では、サルによる農作物被害等への対策が難しいこともあって有害鳥獣駆除として集団捕獲が行われることが多く、その場合、捕獲した個体の処分に困る多くの自治体にとって、大学などの研究機関からの実験用動物としての需要は恰好の引き取り先と考えられてきた面がある。また、そのような有効利用を図る場合に、捕獲や飼養に関する法規制の遵守および捕獲後の処理方法をめぐって疑問を呈されるケースがしばしばあり、その危惧は、2000年12月の新聞各紙の報道でも明らかにされたように現実のものとなった。

日本は、先進国の中では唯一野生のサル（ニホンザル）が生息する国である。現在、1万頭をこえるサルが有害鳥獣として駆除されていることも事実であり、そのような実状から、駆除個体の一部を実験に用いることで実験用サルの供給に関する当座の問題をしのいできた面がある。しかしながら、野生ニホンザルの保護と実験用動物としての利用は、本来直接結びつけて考えられる問題ではない。現在の各地に生息する野生ニホンザル地域個体群の現状をみれば、もし有害鳥獣駆除の圧力が強まれば容易に消失してしまう恐れのある個体群もあり、今後さらに増加するであろう実験用サル類への需要に応えようとすれば、野生ニホンザル地域個体群の多くがいつその攪乱を受けることになる。また、脳神経科学など最先端ともいえる科学が、野生由来のサルに支えられている現状への社会からの批判も強く、実験用ニホンザルの導入に関する一部の不信感を放置することは、今後重要な実験研究の遂行に支障をきたす恐れがある。

国際的には、動物実験をめぐる潮流は、「野生由来のサル類は実験に直接利用しない。」という原則のもとに、実験用として飼育下で繁殖したものだけを実験に利用するという方向が定着しつつあり、中国、フィリピン、インドネシア、ベトナム等のサル輸出国においても、飼育下繁殖された個体の輸出だけが許可されるのが原則になっている。また、近年の国際学術誌では、研究対象動物や実験方法について詳細な記述が要求され、動物福祉の観点からの不備がある論文は受理すらもされないという傾向が顕著になってきている。野生由来の動物を用いた実験は、近い将来国際的な承認を得られなくなる可能性がきわめて高いと思われる。

国内においても、実験には実験用に繁殖・育成された動物を使う方向が確立されてきている。このことは医学・生物学領域のすべての研究者が直面している問題であり、サル類だけが特別扱いされる理由はないはずである。事実、カニクイザルやアカゲザルなどの外国産のサル類を用いる動物実験の大部分は、すでに野生由来サル類の直接の実験利用をやめ、繁殖されたものを用いる方向が確立されてきてい

る。

こうした状況の中で、日本における健全な動物実験の発展のために強く望まれているのは、過去のあり方や現状を肯定的かつ固定的にとらえてそのまま継続するのではなく、最先端科学を支えるにふさわしいサル類を安価で安定的に供給できるような研究用サル類の繁殖コロニーを作ることである。野生からの収奪をなくさなければ、野生ニホンザルの保全是なりたたない。また、野生由来のサルを直接実験に使用し続けることは、実験用動物の質および動物福祉・生命倫理の観点から大きな問題があり、動物実験に対する社会の理解を得る点で、今後ますます困難になっていくであろう。

また、国内において、マウスやラットなどの繁殖・供給を行っている民間企業は多数あるにもかかわらずサル類の繁殖施設がほとんどないのは、サル類の繁殖施設の建設・運営には多額の経費を要するために民間レベルでは採算のとれないことが最大の原因である。サル類の繁殖施設の運営には、国立の機関か、あるいは国の援助によって育成された何らかの組織が望まれる所以である。

本来、このような繁殖施設は、実験用のすべてのサル類を対象にすべきであるが、カニクイザルやアカゲザルについては、すでにいくつかの民間レベルの入手ルートが確立されつつある。それに対して、ニホンザルについては信頼できる入手ルートが確立されつつある。それに対して、ニホンザルについては信頼できる入手ルートが確立されていない上に、現状を放置すれば、仲介業者の不正行為の助長や、野生ニホンザルの保全への重大な影響が懸念され、緊急の課題としてニホンザルの繁殖施設の設置が優先されるべきであると考えらる。

日本霊長類学会は、関係各省及び日本学術会議が、以上のような繁殖施設設立の緊急性と動物実験をとりまく社会情勢をご賢察の上、早急に実験用ニホンザルの繁殖施設の設立を実現してくださるよう、強く要望する。